

第1751回（5月19日）

生鮮輸入野菜流通の特徴と 国内産地出荷行動の基本的課題

小林 茂 典

本報告は、生鮮輸入野菜を対象として、①その国内流通網の形成の主要点を卸売市場流通の位置と役割に着目しながら検討し、②そこから抽出された輸入野菜流通の特徴を踏まえた場合、現在の国内野菜産地の出荷行動は、野菜輸入増大との関連でどのような性格を有するものなのか、について若干の検討を行ったものである。

1. 生鮮輸入野菜流通の特徴

輸入野菜の国内流通に関する諸説の検討、国産品とは異なる輸入野菜流通の基本的特徴（「流通特性」）の抽出を踏まえた上で、次の諸点を明らかにした。

輸入野菜は、本来、市場外流通に乗りやすい「流通特性」を有しているにもかかわらず、国内流通網の形成において、卸売市場は、需給結合機能（売り手と買い手の発見、価格調整、ロット調整等）の点で大きな役割を担っており、輸入野菜流通において、卸売市場流通がその基幹の流通ルートの一つとして組み込まれている。

しかし、この卸売市場を通ずる流通網の形成においては、卸売市場間の荷の移動である転送ルートが中心であるとはいえず、輸入商社による各卸売市場への直接配送を主要ルートの一つに押し上げながら進められている点に注目しなければならない。これは、国産品をもとに組み立てられた卸売市場体系、すなわち転送を軸とする集散市場体系に一定の変容を与え、それを弱めるような動きが野菜輸入増大のもとで進んでいることを意味するものである。

2. 国内産地出荷行動の基本的課題

現在進められている主要産地による出荷先卸売市場・業者の一層の絞り込みは、産地か

ら直接集荷できない卸売市場・業者の数をますます増やすこととなる。出荷先の対象外とされた卸売市場・業者は、これまで拠点集散市場からの転送集荷や産地共販に参加しないアウトサイダーからの直接集荷等に依存せざるを得なかった。しかし、鮮度維持等を含めた物流技術の発達や季節差等を利用した海外産地ローテーションの進展等により、輸入可能な野菜品目は増加し、輸入相手先の範囲や輸入可能期間は大きく拡大しているのであり、国内産地から直接集荷できない卸売市場・業者の集荷方法の選択肢に輸入野菜の存在が加わることとなっている。

国内産地の直接出荷の対象とならない卸売市場・業者は、その集荷力の低下を補うために、転送集荷だけでなく、輸入商社との直接的結びつきを媒介とした海外産地とのつながりを強める方向に向かうことも十分予想できるのである。①国内主要産地の出荷行動（大規模拠点市場への優先的出荷、出荷先市場の一層の絞り込み）→②そこから生み出される卸売市場・業者間の「階層化」→③集荷力の弱い卸売市場・業者の輸入野菜利用の可能性と現実性→④この動きを支える輸入商社の各卸売市場・業者への直接配送、という方向に今後注意する必要がある。

野菜生産・流通の「国際化」が進展し、今後この方向がより一層強まる見込みが強い状況下において、国内産地が特定市場への出荷・有利販売にのみ固執するならば、それは野菜輸入の一層の増大をもたらす基礎条件の一つに転化する可能性があることに留意しなければならない。